



発行元
東京新聞
南千住専売所
TEL3803-1781
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL090-2657-0300

生涯現役 三代目長太郎 はきみ ラシヤ鉄

「手の一部が切っているようだ」
石塚昭一郎さん（72歳）は、裁鉄界のトップブランド「長太郎」ラシヤ鉄（裁ち鉄）の製作者です。

「最終列車に飛び乗ったんです」

中学卒業後すぐにこの世界に入った石塚さんでしたが、職人として始めるにはぎりぎりの年齢でした。三代目として父の元に弟子入りした石塚さんは、下働き7年、目で覚え、体で覚えて一人前になるのに約15年かかりました。

総火造りの鉄（10万円）は、一片の鉄を熱してから鍛え、全工程を一人で製作致します。設計図や物差しを使わず、十分狂わぬ鉄を作るには長年培われた感と経験が一番の道具となります。2本の刃を一点で擦り合わせる微妙な調子は長太郎ならではの、石塚さんだけが出来る職人技です。明治34年、祖父の代より続いている総火造り鉄の他に柄だけロストワックス（铸造）で製作する鉄（2万2千円）も30年程前から取り入れています。

鉄を使い慣れない人は、切っては進み、切っては進みの繰り返しですが、プロは切りながら進む、切点の移動で切って行

きます。鉄の擦り合わせが勝負、切れ味にかかわってきます。その長太郎鉄の良さを真価の判るプロが高く評価し、知る人ぞ知るトップブランドとなっています。

石塚さんのお母さんの何気ない一言が思い出されました。我慢して地道な努力を積み重ねることが経験となり感となり、体に染み込むのでしょうか。変わらぬ優しい笑顔の石塚さん、いただいた言葉を再度掲載致します。

★天の深さを知る

「伝統技術の伝承には時代の流れが速すぎる」

井の中の蛙大海を知らず、されど天の深さを知る。

「そのままの体制でいたら、資金繰り等が難しくたぶん続けて来れなかった。ここまでこれたのは量より質で勝負してきましたから。」と石塚さんはおっしゃっております。

鉄作りという狭い世界しか知らない私は、確かに井の中の蛙ではありませんが、鉄作り一筋に精進することで、職人の世界、技の世界の奥深さも知ることができました。私にはむしろ「天」を見せてもらったという思いが強いです。

「10年分のネジや箱を買ってあるんですよ」鉄の需要の変化に伴い、鉄を作るネジ、入れる箱など、作品として仕上げの部品を作る職人も業界全体の高齢化や需要の激減でいなくなり、入手が困難な事も悩みの種です。

かれこれ数十年、この道に生きてよかった、満足できる人生だった。そう思っている感謝しながら「鉄一筋」の生活を貫きたいと私は念じています。

「後継者がいなくてもいいんです」
気楽に一人で思い通りの製作ができることに満足されている石塚さんです。

今から、5年前に取材させていたとき持たせていただいた鉄は工芸品の光を放ち、美しさに圧倒されました。

「平凡が一番難しい」

長太郎製作所

石塚昭一郎（三代目長太郎）
荒川区南千住5-3-12
TEL (3801) 5415

- ・東京都伝統工芸技術保存連合会長
- ・東京都伝統工芸士
- ・荒川区伝統工芸技術保存会会長
- ・荒川区指定無形文化財